

船木先生のこと

森 智 女

佛教大学に入学し、ういういしい新入生の頃、とても大きな笑顔で迎えてくださったのが船木満洲夫先生でした。大学教授という名前からとても厳しい方々を想像し緊張していた1回生にはとても温かかったのをよく覚えています。授業の中で溢れてくるお話の中に、英文学科を立ち上げるにあたってのご苦労されたお話がよくありました。「あの頃は若くて」などとお話をされていましたが、今も昔もその頃も、少しもお変わりでないように思います。

学生時代、船木先生の授業はとても活気に溢れた、明るい授業でした。文学についてお話をはじめられると、すっかり子供のように楽しそうに語られる授業はとても印象的で、特に詩を引用される時などは、体を前のめりにし、舞台に立っていらっしゃるかのように抑揚をつけて語りだされるのです。それはそれは熱いものでした。

今はもう授業を受ける機会もありますが、授業をととても思い出す時間があります。数年前から共通科目「恋愛論」を担当されています。これは本当に先生が思い入れてらっしゃる分野のようにお見受けします。なぜなら、廊下などでお会いすると文学における様々な状況、恋愛についてを熱くお話しくださり、また、その授業の楽しさをとても興味深く語ってくださるのです。廊下は一瞬にして教室に早替わり。まるでこちらは授業を受けているような感覚につつまれ、どんどん引き込まれてしまうのです。先生の若さの秘訣は、その熱さなのですね。

若さと言えば、もうひとつのとても有名な秘訣があります。やはり「山」です。いつお会いしても、「次はどこどこに登る」、「次はどこどこ。あそこは大変だけれども素晴らしい」と常におっしゃっていて、お話されだすと止まらないのです。国内のみならず、海外にまで、また様々な方々と。その証拠に、

お顔は常に日焼けされており、白い歯がのぞき表情がとても豊かで、より一層たくましくご健康そうに見えるのです。

面白いエピソードがありました。文学部・教育学部・社会学部それぞれの学部長方々をあわせて、通称「三学部長」と呼びます。頻繁に使う呼称ですので新しく入った事務職員も勿論最初からそう呼んでいたのです。ところが、ささいな会話から彼女の誤解が発覚しました。彼女は、「山岳部長」だと思い込んでみんなと話をしていたのです。間違っているものの居合わせた者全員「なるほど」と納得させられました。それぐらい、船木先生と山のイメージは切っても切り離せないものなのです。

またこんなことも思い出します。船木先生は、「ブルドーザー」というあだ名を付けられたとご自身で紹介してくださっていました。登山仲間の方が先生の登山姿を形容して、その命名がなされたそうです。登山をご一緒したことがなくても、先生を知っている私たちにはとてもイメージの沸くあだ名です。「山」のみならず、先生のすべてにおける勢いが「ブルドーザー」なのですから。

先生、いつまでも、熱い「ブルドーザー」でいてください。

最後になりましたが、お体に十分お気を付けて、ますます若々しく、ご活躍されますよう心よりお祈り申し上げます。

